

台湾の大学生にとっての台湾の音楽

石井由理

Taiwanese University Students' Views on Music of Taiwan

ISHII Yuri

(Received September 25, 2015)

はじめに

近年、台湾では大陸の中国との関係をめぐる若者の活動が活発である。2014年3月から4月にかけては、馬英九政権による中国とのサービス貿易協定に反対する学生が、ヒマワリ学生運動と呼ばれる抗議活動を行い（鵜飼啓、2015）、2015年夏には、8月1日に施行日を迎えた高校の新しい教育課程綱要（日本の学習指導要領にあたる）に書かれた内容が中国史観への逆戻りであるとして、高校生が教育部（日本の文部科学省にあたる）の前庭を占拠するという事態が生じている（鈴木、2015）。このような抗議活動以外にも台湾の若者が自らのアイデンティティ、そして台湾社会の在り方を問う活動が活発化している（同上）。

この世代の若者は、日本統治下で行われた日本人化教育でも政治戒厳時代の中国化教育でもない、1990年代に李登輝政権によって実施された教育の台湾化以降の学校教育を受けて育ってきた世代である。つまり台湾社会全体が、他者からの押し付けではない独自のアイデンティティの模索を始めた時代に、自分自身が何人であるかのアイデンティティを形成してきた人々である。この自由に台湾のアイデンティティの模索ができる時代に育った台湾の若者たちは、文化的にはどのような台湾アイデンティティを形成してきたのであろうか。この問いを追求する試みの一つとして、本稿では台湾の大学生たちの音楽文化に焦点を当て、彼らがどのような音楽を台湾の音楽であるとみなしているのか、それは中華民国国民としての音楽アイデンティティとは異なるものなのかを、2013年9月に台湾で実施したアンケート調査に基づいて考察していく。

歴史的背景

アンケート調査の概要を述べる前に、その背景として、台湾が経験してきた教育政策の変遷について概観する。

台湾住民の圧倒的多数は、明朝の頃から徐々に中国大陸南部から移住してきた福佬語、客家語などを話す華人である。さらにそれ以前から住むオーストロネシア系言語を話す10以上の民族（原住民と呼ばれる）を加えた戦前からの住民を、一般的に内省人と呼んでいる。このような住民をもつ台湾は、19世紀末までは清国の統治下にあったが、事実上は放置されていた（Chang, 2002）。19世紀末から20世紀前半は日本の統治下であり、日本本国における近代的日本人としてのアイデンティティ形成の努力と同様に、台湾住民に対しても近代的日本人のアイデンティティを育成すべく、「国民精神」を歌った歌詞の唱歌教育が行われた（劉、2005: 190）。

第二次世界大戦後、蒋介石率いる中国国民党政府に返還されたが、国民党政府は、台湾を中国全土を領土とする中華民国の中の一省とみなし、中国全土を視野に入れた中華民国国民育成のための教育政策を実施していく。1949年に国民党が大陸での共産党との政治闘争に敗れたため、蒋介石とともに多くの人々が大陸から台湾に移住してきたが（一般的に彼らのことを外省人とよぶ）、中華民国としての政策は継続した。よってこの時代の学校音楽教育は、大陸の中国の音楽文化を伝える内容となっており、掲載曲の多くは大陸のものであった。台湾の歌曲を扱う場合も、その歌詞は北京語に翻訳されていた。

1990年代になると、初の内省人総統となった李登輝によって教育改革が行われ、学校教育の台湾化が進んだ。もっとも顕著なのは小学校に「郷土教学活動」（中高学年対象）、中学校に「郷土芸術活動」および「認識台湾」（いずれも中学1年対象）が導入されたことである（林、2009：188）。この場合の「郷土」は台湾を指す。音楽においては既に国定教科書のみだった教科書の発行が自由化されて、民間教科書会社編集の教科書が発行されるようになっていたが、大陸の曲や音楽文化紹介が大幅に減り、台湾独自の音楽文化や曲が掲載され、歌詞も一般的に台湾語と呼ばれている福佬語（以下では台湾語と表記する）をはじめとする原語の歌詞が併記されたほか、世界共通の音楽文化としての欧米クラシックを中心とした内容へと変化している。この傾向はこれ以降、民進党政府、2008年に再度政権をとった国民党政府の時代にも継続して見られるものである。また、呉叡人（2015）によれば、外省人と内省人の関係も、1990年代の台湾化の時代に一時期対立が深まったものの、既に戦後70年を経て住民のほとんどが台湾生まれとなった今、若者たちの間に外省人、内省人の区別意識はなくなっているという。

アンケート調査

アンケート調査は、2013年の9月に台湾の嘉義大学と台北教育大学で実施した。いずれも教員養成課程の学生で、計173名の学生が回答した。回答者は自己申告で台湾人アイデンティティをもつ者である。アンケートの内容は、筆者が過去に実施した日本とタイの調査を踏襲し、「台湾の音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」ということばから連想する曲の曲名を10曲以内（回答曲数は回答者の自由）で列記し、作曲者名、歌手名、ジャンルなどを可能な範囲で記入するものである。これらに加え、回答者自身が実際に聞いている音楽を比較するために、「好きな音楽、よく聴く音楽」にも10曲以内で回答するように依頼した。例外となる回答が出た場合への対応策としては、回答者自身が自分の回答が何らかの理由によって他者とは異なると考える場合に、その理由を記入してもらうことにした。また、回答者によって「台湾」「我が国」「郷土」の三つが意味するものを同じであるか、異なると考えるかが異なる場合があるため、各質問に対する曲名の重複は可能とした。この三つに対する認識の個人差は、筆者が過去に実施した日本とタイでのアンケート調査でも見受けられたが、台湾の場合はその歴史的背景からさらに事情が複雑である。

まず、「我が国」といった場合は、戦後大陸から移住してきた国民党政府が主張する中華民国を意味する場合が多い。よって、「我が国」には中国大陸も含まれるという解釈がある。その一方で、現実には国民党政府が台湾に逃れて以来、統治してきたのは台湾とその近隣の島々に限られるため、台湾の多数派である内省人の人々にとっては、大陸までが自国であるという感覚は持ちにくい。また、「郷土」という言葉に関しても、1990年代の教育の台湾化が、台湾を「郷土」と呼ぶことによって行われたこともあり、台湾の中の自分自身の具体的な出身地というよりも、「台湾」を「国」以外の別のことばで言い換えたものととらえる場合がある。

次に回答曲を分類する際のジャンルであるが、台湾の人たち自身がどのように曲を区別しているかを反映するため、第一段階として回答者自身にジャンルや歌手名を記入してもらったほか、データを整理する段階で台湾人アシスタントにその分類の確認と再調査を依頼した。さらに著者自身もジャンル不明の曲の調査を行った。前述の日本やタイの調査においても、単に音階やリズムなどの音楽的な違いでは回答者のジャンル認識は説明しきれず、歌詞の内容や作曲者の背景（たとえばタイの場合は現国王作曲のジャズは「我が国の音楽」とする回答が多かった）、その曲が流れる場面（スポーツチームの応援歌やキャンペーンソングなど）などによって回答者はジャンルを分けて認識していたが、台湾もその点は共通であった。

そして前述の歴史的な背景が上記二か国以上にさらに分類を複雑にした。その一つは、原住民と呼ばれる少数民族の民謡と、古い時代に大陸から伝わった民謡以外には、西洋音楽の影響が入り込む近代化以前の台湾で生まれた、いわゆる作者不明の民謡にあたるものがほとんどないことである。多くの回答者が民謡（台湾では民歌という）と答えた曲の多くは、20世紀になってから作られた、作曲者がはっきりとしている曲であり、よって日本による音楽文化の近代化（西洋化）の影響を受けているものである。本稿の分類では作曲者不明の曲を自然民謡、作曲者が明確な曲を創作民謡としている。創作民謡には台湾語のものと北京語のものがある。さらに、1970年代にアメリカのニクソン大統領の中華人民共和国訪問に対する反発によって、それまでの西洋音楽への傾倒を見直し、自分たちの音楽文化を作ろうという動きが現われ、校園民歌と言われるジャンルが登場した。このジャンルの曲はほとんどが北京語の歌詞である。現代の大衆歌謡である台湾流行音楽のジャンルに関しても、台湾語と北京語を分けて考える必要がある。中には、もともとは外国の流行音楽だった曲に台湾語や北京語の歌詞をつけたものもあり、それらはもと外国音楽としたが、今回の調査で判明した曲以外にもそのような曲が含まれている可能性は否定できない。外国曲のカバー曲についてはさらなる調査が必要である。また、国家によって作られた「国歌」や「国旗歌」などの曲は愛国歌曲としたが、それ以外に、大衆歌謡から生まれた「中華民国」を掲げた歌を中華民国の音楽とした。以上のように可能な限り台湾の人たち自身のジャンル認識に沿うように分類した結果が表1である。

表1の中の「回答数」とあるのは、曲目数ではなくのべ回答数であるので、10名の回答者が同じ曲を回答すれば回答数は10となる。それぞれの質問に対する合計の回答数が異なるため、ジャンルの割合を比較するために便宜上パーセントでも表したが、それらが意味することを読み解くには台湾の社会的、歴史的背景を質的に考察しなければならない。

表1 大学生へのアンケート結果

	台湾の音楽		我が国の音楽		郷土の音楽	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
愛国歌曲	6	1%	61	8%	0	0%
自然民謡	25	3%	17	2%	58	10%
創作民謡(台湾語)	113	12%	61	8%	146	26%
創作民謡(北京語)	25	3%	27	4%	34	6%
校園民歌	14	1%	17	2%	15	3%
台湾流行(台湾語)	551	60%	106	15%	203	37%
台湾流行(北京語)	139	15%	383	52%	47	9%
元外国音楽	28	3%	16	2%	24	4%
西洋音楽	4	0%	7	1%	20	4%
大陸音楽	2	0%	6	1%	7	1%
キャンペーンソング等	7	1%	13	2%	0	0%
日本流行	0	0%	22	3%	1	0%
中華民国の音楽	7	1%	0	0%	0	0%
合計	921	100%	736	100%	555	100%

アンケート結果

まず全体を見てみると、「台湾の音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」のうち、「台湾の音楽」と「郷土の音楽」への回答パターンは比較的似ているのに対し、「我が国の音楽」への回答パターンは大きく異なっていることがわかる。それは、「愛国歌曲」に分類される回答、内省人マジョリティーの言語である台湾語の歌詞をもつ曲の回答、外省人が持ち込んで「国語」とした北京語の歌詞をもつ曲の回答の、回答パターンの違いによるところが大きい。これは、台湾と郷土はほぼ同意であるが、台湾と我が国は別の意味をもっており、「国」から連想するのは中華民国でありその国語である北京語であるということを示している。

次にそれぞれのジャンルについて見ていく。まず愛国歌曲のジャンルであるが、回答数が曲目数ではなくのべ回答数であることを考慮すれば、「台湾の音楽」に対するこのジャンルの回答数は、筆者が過去に実施した日本やタイの調査結果と比較して顕著に少ない数字である。それは、これら2国の場合には「国歌」を回答する学生が大変多かったのに対し、台湾の場合は「中華民国国歌」を回答した者が極端に少なかったからである。多くの回答者にとって「中華民国国歌」は「台湾」から連想される曲ではないのである。これに対して「我が国の音楽」への回答としては「中華民国国歌」が多く、約3分の1の回答者が回答している。

自然民謡のジャンルは、「台湾の音楽」「我が国の音楽」への回答としては少ないが、「郷土の音楽」に対する回答は10%となっていて、「台湾の音楽」の3%の3倍以上となっている。その原因は「郷土の音楽」に対する回答として、「丟丟銅仔」という20世紀初めから伝わる宜蘭民謡の回答が33回答と多かったためである。回答者の出身県は必ずしも宜蘭県ではないので、郷土としての台湾を代表する曲として回答されていると考えるのが妥当である。そのほかにも自然民謡はあるが、台湾はその成り立ちからして多民族、多言語社会であり、近代化以前から伝承されている民謡の多くは各民族の言語で歌われてきたものであるため、ある民族が長く継承してきた民謡であっても、他の言語を話す台湾住民にとっては自らのアイデンティ

ティーンとはなりにくいようである。

この「丟丟銅仔」がなぜ「台湾の音楽」としてはそれほど回答されなかったのかについては、その他の回答曲の傾向から「台湾」と「郷土」の意味合いの違いを考える必要がある。創作民謡と台湾流行音楽を比べてみると、台湾語であるか北京語であるかにかかわらず、「台湾の音楽」「郷土の音楽」のいずれにおいても台湾流行音楽の回答の方が創作民謡の回答よりも多いが、台湾流行音楽の比率は「台湾の音楽」に対する回答においてより高くなっている。つまり、創作民謡は「台湾の音楽」としてよりも「郷土の音楽」として連想される場合の方が多いということである。創作民謡は、20世紀前半から半ばにかけて作られた曲が多く、西洋音楽の影響も受けていて、日本であれば民謡というよりもむしろ古い歌謡曲や演歌と考えた方が近いような曲が多く含まれる。それに対し、台湾流行音楽は比較的新しい若者音楽文化であり、古いものでも1980年代のものである。つまり創作民謡と台湾流行音楽の区別はかなりあいまいなものであり、ある程度の年月を経てなおかつ台湾社会の人々に共有され、歌い継がれている曲を民謡と認識しているようである。この回答傾向から考えると、「台湾の音楽」にはより現代的な曲を選ぶ傾向、「郷土の音楽」には少し年月を経て世代を超えて共有されているような曲を選ぶ傾向があるということであり、創作民謡以上に古い時代の自然民謡である「丟丟銅仔」は、「郷土の音楽」としてはじっくりくるが、現代の台湾を代表する「台湾の音楽」としては時代遅れの感があるのであろう。

続いて台湾流行音楽のジャンルの回答を見ると、民謡ジャンルでは台湾語歌詞の曲に対して北京語歌詞の曲が少なかったのに対し、台湾流行音楽のジャンルでは「我が国の音楽」への回答において北京語と台湾語の曲の回答数が逆転する。上述のように台湾流行音楽に分類されるのは比較的新しい大衆歌謡であり、国語となった北京語で教育を受けてきた世代の作曲家、歌手によって書かれた曲が主流となっている。この世代の人々にとっては北京語が自らの感情をもっとも率直に表現できる言語であり、自分のアイデンティティーと一致する言語になっているのである。また、近年の中国大陆の経済的発展に伴い、その広大な市場に照準を合わせた音楽産業の戦略としても、北京語歌詞の曲の方が好ましい状況にある。このような理由で台湾流行音楽ジャンル全体では、北京語の曲が圧倒的に多く存在する。「我が国の音楽」と中華民国、北京語のつながりから連想されるならば、この豊富な北京語台湾流行音楽が多数回答されるのも納得のいく結果である。

興味深いのは、それにも関わらず「台湾の音楽」「郷土の音楽」に対する大学生の回答は北京語台湾流行音楽よりも台湾語台湾流行音楽の方が多かったという点である。このうち、「郷土の音楽」については、上述のように、ある程度時間を経て世代を超えて共有されているという時間的な要素があるため、そのような曲には台湾語の歌詞の曲が多いからという理由が成り立つ。しかし「台湾の音楽」に関してはこの理由は成り立たない。北京語の流行曲の方が、圧倒的に数が多く、それを聴いている若者の第一言語も北京語であるにもかかわらず、「台湾の音楽」としては台湾語歌詞の流行音楽が選ばれる背景には、やはり北京語は中華民国の言語であり、台湾のアイデンティティーを代表する言語は台湾語であるという、言語の要因があるようである。

予想外の回答としては、「我が国の音楽」に対して日本の流行音楽を答えた回答があったことがあるが、この回答は筆者のアンケート用紙にある「我が国」を回答者自身の国ではなく、アンケートを実施した筆者にとっての「我が国」と解釈したためではないかと考えられる。それはこの種の回答が特定の回答者に偏っていたことと、日本統治とは関連の無い現代曲が回答

されていたことからの推測であるが、アンケートは与えられたキーワードに対する自由連想による回答を求めたものなので、「我が国」が何を意味するのかについての説明はせず、回答者の解釈にまかせたためであろう。

これまではのべ回答数にもとづいて述べてきたが、次に多くの回答者が共通して選んだ曲はどのようなものであったかを見ていく。タイの事例における国王作曲のジャズのように、ジャンルとしてではなく、曲として特別な意味をもつ場合があるからである。

表2 「台湾の音楽」上位5曲

曲名	回答数	ジャンル	言語
望春風	50	創作民謡	台湾語
家後	36	台湾流行	台湾語
雨夜花	33	創作民謡	台湾語
傷心的人別聽慢歌	16	台湾流行	北京語
姐姐	15	台湾流行	北京語

表3 「我が国の音楽」上位5曲

曲名	回答数	ジャンル	言語
国歌	44	愛国歌曲	北京語
望春風	26	創作民謡	台湾語
家後	23	台湾流行	台湾語
雨夜花	19	創作民謡	台湾語
入陣曲	13	台湾流行	北京語
国旗歌	13	愛国歌曲	北京語

表4 「郷土の音楽」上位5曲

曲名	回答数	ジャンル	言語
望春風	57	創作民謡	台湾語
雨夜花	37	創作民謡	台湾語
丟丟銅仔	33	自然民謡	台湾語
家後	31	台湾流行	台湾語
雙人枕頭	14	台湾流行	台湾語

これらの表からも明らかなように、いずれの質問に対しても上位4位以内に「望春風」「雨夜花」「家後」が入っており、各質問に対する回答結果の傾向を決めるのは、これら3曲以外の曲である。「台湾の音楽」では4位以降に北京語台湾流行音楽が並んでいる。上位3曲ほど回答が集中してはおらず、全体の回答としても台湾語台湾流行音楽の曲の方が北京語台湾流行音楽よりも多いが、10人以上の人が回答する北京語歌曲も出てきており、北京語流行曲も徐々に「台湾の音楽」を代表するものとして認識されつつあることを示唆している。「我が国の音楽」においては、これら3曲の上に第一位として「国歌」があり、第5位としては「国旗歌」がある。そしてこれら3曲以外の10位以内の曲はすべて北京語の歌詞の曲である。「郷土の音楽」については「丟丟銅仔」のところで少しふれたが、これら3曲の他に第3位として「丟丟銅仔」が入っている。5位以降も台湾語の曲の方が北京語の曲よりも多い。

上位常連となっている3曲のうち、「望春風」と「雨夜花」は鄧雨賢という作曲家によって、日本統治時代に書かれた作品である。鄧雨賢は日本で音楽教育を受けたこともあり、日本を通して西洋音楽文化を学び、台湾の音楽文化との融合を試みた作曲家であり、いわば台湾の音楽

文化の近代化を象徴する作曲家である。日本であれば滝廉太郎にあたる存在かもしれない。彼の作品が2曲選ばれていることは、台湾の人々にとっての台湾音楽文化のアイデンティティーは、やはり近代化された音楽にあるということであろう。

残る1曲である「家後」は比較的新しい曲であるが、台湾語で歌っている歌手江蕙の歌唱で知られている曲である。大学生の回答には歌手として台湾のみならず大陸においても人気の高い歌手である周杰倫も書かれていたが、いずれにしても台湾を代表する歌手である。

台湾の大学生が「好きな音楽、よく聴く音楽」

最後に、上記のアンケート結果を回答者が実際に日常生活で聞いている音楽と比較するために尋ねた、「好きな音楽、よく聴く音楽」への回答について考察する。この項目への回答を分類したものが表5であるが、ここからは、台湾の大学生の日常生活の中にある音楽のほとんどが西洋の影響を受けた流行音楽であることがわかる。圧倒的多数であるのが北京語の台湾流行音楽であり、過半数を占める。それに続くのが西洋流行音楽、韓国流行音楽、日本流行音楽である。

前節で述べた「台湾の音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」への回答では、「台湾の音楽」と「郷土の音楽」において台湾語の台湾流行音楽が最多を占め、「我が国の音楽」においても、台湾語の台湾流行音楽は北京語台湾流行音楽の回答に次いで多かった。しかし、大学生の実際の音楽生活からは、台湾語の台湾流行音楽はほとんど姿を消している。北京語を第一言語とする人々が大多数を占めるようになった今、歌う方にとっても聴く方にとっても、北京語はもっとも身近で自然な言語となっているのである。また、中国大陸との経済的なつながりが強まっている現在、音楽産業が流行音楽として生み出すのは、当然のことながら多くの消費者がいる北京語流行音楽となるということもある。しかし、言語が同じであるにもかかわらず、逆に中国大陸の流行音楽が台湾の大学生に聴かれているという現象は見出せなかった。同じ北京語の歌であっても中国大陸の音楽文化は台湾の大学生には受け入れられておらず、台湾と大陸の違いはここでもはっきりと意識されている。

表5 「好きな音楽、よく聴く音楽」への回答

	回答数	%
自然民謡（北京語）	2	0%
台湾流行音楽（台湾語）	18	2%
台湾流行音楽（北京語）	548	55%
台湾流行音楽（英語）	1	0%
台湾流行音楽（もと外国音楽）	3	0%
西洋古典音楽	18	2%
西洋流行音楽	194	19%
中国大陸民謡	11	1%
日本流行音楽	87	9%
韓国流行音楽	115	11%
上記以外のアジア流行音楽	6	1%
合計	1003	100%

おわりに

以上、台湾の大学生を対象として実施したアンケート調査をもとに、台湾の若者がどのような文化的アイデンティティーをもっているのかを、音楽文化を事例として考察してきた。この考察から以下のことを明らかにできたと思う。まず、「国家」をめぐる台湾のポジションの曖昧さは、1990年代からの台湾社会におけるアイデンティティー模索の時代を経てもなお、やはり解決していないということである。「国家」といえば中華民国であることは「我が国の音楽」に対する「国歌」「国旗歌」の回答から明らかであるが、その一方で、台湾が中華民国に返還される以前の、しかも日本の影響が大きい鄧雨賢の曲が2曲もすべての質問の上位3曲に入っているということは、音楽文化としてのアイデンティティーはこれらの曲、つまり西洋音楽の影響を受けた近代化初期の台湾の音楽にあると考えられるであろう。言語においても、国語は北京語であっても台湾の言語は台湾語であるという意識が、「台湾の音楽」「郷土の音楽」の回答の中には現れていた。

次に、国民党政府による北京語の国語としての導入は、半世紀以上を経て着実に台湾の人々の母語を台湾語から北京語に変えつつあり、音楽文化への影響は言語を通して現れつつあるということである。大学生の日常の音楽生活にはそれが顕著に反映されている。世代交代が進めばその傾向はますます強まり、台湾語が自分の感情を最も素直に表現できる言語であると感じる人はほとんどいなくなるであろう。今回の調査でも明らかとなった北京語台湾流行曲のクラシック化の現象は、台湾＝台湾語というアイデンティティーが徐々に台湾＝北京語というアイデンティティーに変わりつつあることの表れだと考えられる。呉が述べた外省人、内省人の区別の希薄化の一面であるといえよう。

これら2点は複雑な歴史ゆえに台湾社会が抱え込んだジレンマである。台湾独自のアイデンティティーとして、台湾語や台湾において台湾人作曲家によって近代化された音楽文化を主張したい。しかし現実には多くの人々の話す言語は北京語であり、日常の中の音楽文化は北京語流行音楽である。やがて北京語歌詞をもつ曲こそ台湾の音楽文化を代表するものであるとする時代が来るのであろうか。その時には台湾語の「望春風」「雨夜花」「家後」は台湾アイデンティティーを体現する曲ではなくなるのであろうか。それとも台湾の音楽文化はこれらを維持しつつ重層的に重なっていくのであろうか。さらに、北京語を媒介とした中国大陸からの音楽文化の流入と台湾の音楽文化との混合は起きるのであろうか。現段階では答えの出ない研究課題である。

付記：本稿はJSPS科学研究費基盤研究（C）課題番号25381203「音楽文化のグローバル化と音楽教育を通じた国民アイデンティティーの形成」の成果の一部である。

参考文献

鵜飼啓 (2015) 「朝日新聞Digital」

<http://www.asahi.com/articles/ASH814J8VH81UHBI012.html>

2015年8月17日アクセス

呉叡人 (2015) 「毎日新聞」 5月29日12版

鈴木玲子 (2015) 「毎日新聞」 2015年5月29日12版

Chang, W. P. (2002) 「台湾の近代化と日本」 西川長夫・松宮秀治（編）『幕末・明治期の国民

国家形成と文化変容』605－630頁.

劉麟玉（2005）『植民地化の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』雄山閣

林初梅（2009）『「郷土」としての台湾 郷土教育の展開に見るアイデンティティの変容』東信堂